法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-17

法政大学図書館一〇〇年史 : 第一編 図書館

通史:あとがき

高橋, 彦博

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館

(開始ページ / Start Page)

281

(終了ページ / End Page)

287

(発行年 / Year)

2006-03

めとがき

―大学史としての図書館史

書館開館一○○周年」がほぼ同時に記念されることになった。 政大学図書館の開館であったと理解されている。大学の開校から約二○年遅れた時点における図書館の開 から一九年後の一八九九年(明治三二年)に和仏法律学校の図書閲覧室が開設された。この図書閲覧室の開 法政大学が私立の法律学校として開校したのは一八八○年(明治─三年)であったことが確認されている。 したがって、二〇世紀の最後の年となる二〇〇〇年の時点で「法政大学開校一二〇周年」と「法政大学図 対館であ 設が法 それ

しかし、 に遅らされた。『法政大学一二〇年史』は、『法政大学と戦後五〇年』として、二〇〇四年三月に刊行された。『法 遅れた分だけ、 史』刊行の遅延については、関係者にご迷惑をおかけしたことを編集委員会としておわび申し上げたい。しかし、 政大学図書館一○○年史』は、さらに遅れて、二○○六年三月、ようやく刊行の運びとなった。『図書館一○○年 当初の計画では『法政大学一二〇年史』と『法政大学図書館一〇〇年史』が並んで刊行されるはずであった。 関係者の歴史編纂への熱意が飽くことのない史実探究作業への傾注をもたらし、予定の刊行日程は大幅 内容の充実があったはずであると自負している。

パ ス構成の変化に対応して、大学図書館のロケーションとスタッフの構成も大きく変化せざるをえなかった。『法 近年における法政大学のキャンパス構成は、かつてない大きな変貌を見せて今日にいたっている。そのキャン

り、 政大学図書館一〇〇年史』 図書館一〇〇年の歴史に対する静態観察を試みるにはかなり不向きな状況であった。 の編纂が取り組 まれた時期は、 法政大学が世紀の変貌を遂げる過程にあった時 四期であ

の分割は、 部図書館、 法政大学における三キャンパス体制の編成過程に対応して、 「中央図書館」方式を変貌させる大事業となった。 多摩図書館とその態様を変え、「三館体制」をとることになった。 法政大学図書館の学内配置も市ヶ谷図 新設図書館に対する既設図書館: 書館、 工学

文律が課せられていた。 定された執筆分担には、 での史学を専攻する学部教員の参加を主体とするやや不定形な編集委員会方式であった。 そのような状況にあって、『法政大学図書館一〇〇年史』編纂の体制として自ずと生み出されたのが、 執筆の途次において定年を迎えても、他大学へ転出しても、 変更や交代を不可とする不 専攻領域との 広い 意味

貫かれていた。 た。この編集委員会において についての報告が 図書館長の招集で連絡会議としての委員会が随時、 なされたが、 「編集委員長」 毎回、 委員会の が置かれることはなく、 「座長」 開催され、そこで、 となるのは委員の中の 所属配分を問わない参加型委員会の方式 執筆課題に対する調査と執筆進 「最古参」 者という方式がとられ 造捗状況

視点と視野に束縛された暦年記述の記録に終わりがちであるように見受けられる。 大学の図書館記録は、 館実務の担当者といわゆる する方式であったと言えるであろう。 結果論になるが、このような学部を問わず専攻者が参加する委員会方式は、 そもそもまとめられた例 「図書館学」の専門家を中心に編纂され執筆されるのが常とされてきた。 大学図書館の記録作成は、 が少ないのであるが、 通常、 ともすると 図書館 大学図書館史編纂にもっとも適合 行政の記録作成と見なされ、 「図書館学」特有の限定された その結果 図

委員を務めていた。 のように指摘している例があって参考になる。 わ ゆる 「図書館学」 同時に東京大学図書館専門職員養成コースにおける講師の任にあった。 に特有の限定された視点については、 故・ 長澤教授は、 元法政大学教授の書誌学専攻 九五〇年代の法政大学図 書館にあって図 長澤規矩也氏が

うか―としては成立する筈がないと思ふ。 い。…これらは運営法か経営法かであって、せいぜい運営論、 『長澤規矩也著作集第四 館界の人々 が好んで使ふ語であるが、 巻 所収。 私は、 図書館といふ機関の下に学といふ文字を加へても、 図書館学といふ学問は純粋の学問 経営論に止まる。」(「書誌学と図書学と図書館学」、 ーといはうか、 科学にはなるま 科学とい

に指摘していた。 図書館学なるもの曖昧さを指摘する長澤教授であったが、 (同上) ただし、 図書館史については、 その意義を次のよう

史、 が 政大学の図書館史編纂は、 今回 図書館の が 思想史、 :文庫の歴史を講ずるよりも、 0 図書館史は学問になりうる。 『法政大学図書館一〇〇年史』の編集委員会には、 歴史」に一ページを付け加える作業となることができたと言えよう。 近代中国史、 わが国の近・現代史把握と一体化し、 社会労働運動史の専攻者たちが参加していた。 わが国の図書館人にとっては、 しかし、 従来の職員養成過程の図書館史のやうに、 図書館実務・大学史編纂実務の関係者に加え、 故・長澤教授が期待したような 明治以降のわが図書館 そのような構成をとることによって 西洋の図 0 歴史が必要である。 書館 「明治以降のわ \hat{O} 歴史やわ 法制

連でとらえる視点である。 け加えていた。 この委員会にあっては、 その一 は、 その二は、 図書館史を 長澤教授の図書館史の意義論を承けた上で、 い 「大学図書館史」として特価し、 わゆる 「図書館学」 に対する批判的評価とは違った意味で、 私立大学史一般とくに個別大学史との関 あえて、 次のような二視点を付 大学図書館

における「司 書的職 務 を重視し、 大学の 事務 般とは異なった図書館特有の定型的業務の積み重ねを評 価 する

視点である。

踏まえた記述となっている。 大学図書館一〇〇年史』は、 目次に特記し、 ここで、すでに実績となっている法政大学図書館史と法政大学史との関係を一覧しておきたい。 そのような大学図書館史としての特性の自認から、 表記についても画一化を避け、 以下のような、 これまでの法政大学史における 分担執筆者の個別の研究調査の報告であることを強調してある。 本書においては章別執筆分担の上、 「付属機関史」としての図書館史を 各章担当 今回 0) 執筆者名を の]法政

『法政大学八十年史』「第五編 第一 章 図書館」 (執筆 山村喬 経済学部教授)、 九五一 年。

東京法学校から和仏法律学校へ、さらに法政大学へと歩む大学史の過程で、

専門学校としての、

そして大

徴は、 学としての図書館が一 士見町校舎における新図書館の発足に果した平貞藏図書館長の役割が記録されてい 正 岡子規、 三木清 ○万冊図書館から五○万冊図書館へと充実されてきた経過が辿られている。 戸坂潤、 服部之聡、 などの個人文庫の ほ か協調会文庫にあるとされてい . る。 法政大学図書館 の特

2 『法政大学百年史』 「第三編 図書館」 (執筆 野田 [正穂 経営学部教授)、 九八〇年

政府刊行資料の収集による研究図書館としての機能発揮の充実がはかられた経過が明らかにされている。 書館としての 郎 らの教授たちによって 書閲覧室が図書館となる経過において、 また、 機 戦 能 後の 発揮 図書館において早い時期からら日曜開館 が は はかられ 図 書寄贈 た経過が述べ の 運 動 高木友三郎、 られている。 が展開され、 下村宏、 やがて、 新図書館の 開架制 安部能成、 マイクロ (部分) 充実が の はかられた経過が記録され 和辻哲郎 フ 実施が取り 1 ル ム・ラィブラリ 小 宮豊隆、 組まれ、 学習図 野上

い

わ ゆる 「差別目録カード」 の問題に対する図書館としての対応には、 とくに詳しい記録が残されている。

3 『法政大学と戦後五〇年』「第二編 図書館」 (執筆 高橋彦博 社会学部教授)、二〇〇四

題と重なりあう伝統的図書館と電子図書館の二側面の同時追求を、 た。 てとらえている。 れている。 私大図書館協会の場で示された、この課題に対する法政大学図書館の 後直後期から、 戦 後の法政大学図書館の主要課題となった学習図書館と研究図書館の二側 執筆時点は本書の執筆時点と前後している。 大学図書館基準の策定が課題となり、 その過程で、 大学図書館にける「ヤヌスの双面」 私大図書館基準の確定が課題とな 積極的な取 面の同時 ŋ 組 みの 追求、 経 過が その課 記録 さ

ると思われる一点として、 以上三点の「付属機関史」としての図書館史とは別に、 次の法政大学図書館史があった。 大学図書館史としてはおそらく本邦嚆矢の書になって

④酒井勇二纂述『法政大学図書館史』(法政大学図書館発行、一九六三年)

あくまで、 あった。 こ の 一 は、その編纂作業の起点を、 後日、 冊は、 原資料発掘を心掛けた本格的な大学史としての図書館史となっていた。 分割発表された原稿を集成し、タイプ印刷「私家版」 法政大学の 『図書館報』 この酒井『図書館史』に置いている。 に分割発表されているが、もともとは書き下ろされた一 形態の一冊としたものである。 今回の 『図書館一〇〇年 書 内容は、 0 草 稿

大学八十年史』 れた経過については、 く、「大学史としての図書館史」を目指す内容になっていた。そもそも、 図書館員の立場からまとめられた酒井『図書館史』であったが、「図書館学」 の編纂実行委員会の一員であった。 当時の谷川徹三総長が 『八十年史』 酒井の調査によって法政大学の の序文で書き記しているとおりである。 酒井は、 の視点にこだわる図 図書館員であるとともに 開校年が一八八〇年と確定さ 書館 史で 『法 はな

求めているが 学の学長に 可能となっていた。そして、 来しながら私立大学図書館協会常任理事の役割を果たす井本を支えてい この 酒井は、 「図書館の拡充充実を計る件」 (『私立大学図書館協会会報』 若手の 館員として、 大学図書館を大学の「心臓である」とする井本の宣言的な文言は、 戦後の 第二号、 で要望を行い、そこで大学図書館は大学の 初代図書館長であった井本健 一九五二年二月)、この井本のアピー |作の秘書役を務めていた。 たのは酒井であった。 ルは、 「心臓である」 酒 !井の助 井本 そのまま酒井 視力に支障 は、 力が との 各私 認識 あ つ 立 回図 て 大 を を

書館史』の

「はしがき」に再登場させられている。

担当職 うかがうことができた。 盾 書館業務に関する実務記録があったことを見落としてはならないであろう。 学図書館を支える教員と職員の一致した態勢であったが、その背景に、 定期刊行誌や小冊子がある。 年史』に収録できず、 今回 法政大学の図書館史を「大学史としての図書館史」として実現する背景となるのは、 (一九六一年)』『法政大学図書館個人文庫案内』『システム90計画 の 員の営々たる定型的業務の蓄積を通じて大学図書館が大学の 図書館史編纂にあたって、 充分にに紹介することもできなかったが、『らいぶれりあん』『図書館白書=その現状と矛 また、 これら図書館業務の実務記録が示しているのは、 それらのお話を記録として残すことができた。 図書館実務経験者の何人かのOB職員の方から在職時の経験について 「心臓」 ―法大図書館の 「図書館日誌」 として機能してきた実態であ たとえば、 大学図書館における 以下にヒアリングの日 再構成』『HUL通信』 「図書館報」 残念ながらこの 以上に見たような法政 作成などの図 司 :時と参 書的職 お話 などの 00 加 務 者 大

九九七年 八月一一日 酒井 勇二

を記して編集委員会からの感謝の言葉とさせていただく。

(敬称略

九九七年一二月 四日 小川 徹

九 九七年一一月二〇日 Ш 本 清 関 英司 西沢 好喜 長谷川重夫

一九九八年 一月二三日 増田 稔

九九九年 三月二五日 久松 妙子 長谷川貞子 新井ナオミ 御子柴啓子

一九九九年一二月二〇日 川本 清 久松

妙子

じ一○月一日に、「法政大学創立一二○周年・図書館創設一○○周年記念国際シンポジウム」が竣工直後のボアソ 書館の電子図書館機能充実の現状と展望が検討されている。このシンポジウムは法政大学図書館の新たな ナード・タワーで開催された。その第三セッションとして「大学図書館の使命と近未来像」 0) となる意義をもっていることと思われる。その詳細な記録が、法政大学図書館編『開かれた法政21 なお、 「起点」として確認されているが、本書第九章に付記したように、二一世紀開幕の前夜となる二〇〇〇年 九世紀の末年となる一八九九年の一〇月一日における和仏法律学校図書閲覧室開設が法政大学図 が設定され、 伝統と展望り 「起点」 大学図 書館 0) 同

意味における「鑑」として機能するであろうことを期待したい んに変容しつつあるように見受けられる。 歴史は記憶であり、 記録であるとともに「鑑」である。今日、法政大学は、 そのような法政大学にとって、「大学史としての図書館史」が、 社会の変貌に対応し大きくだいた 多様な

(二〇〇一年三月) として刊行されているのでご参照いただきたい。

一〇〇五年一一月三〇日

"法政大学図書館一〇〇年史』編集委員会 高橋 彦博